

---

# ろってんひーろー

久木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ろってんひーろー

### 【Nコード】

N3202G

### 【作者名】

久木

### 【あらすじ】

私は死んだのかもしれない。でも死んでいないのかもしれない。曖昧な境界線をまたいで踏みに行きつと私は人じゃないものになったのだろう。目覚めた場所は知らない世界。この世界は半端ものの私に、いったい何の役をさせたいんだ\*\*\*現在休止中\*\*\*

## 序章 - 1 : 喪失 (前書き)

\*この話はストーリーの過程で暴力シーン及びそれに準ずるシーンが含まれる予定です

## 序章 - 1 : 喪失

たぶんそれは死だったのだろう。

別に特別な人生を歩んでいたわけではない。両親がいて5歳年上の兄がいて1歳年下の弟がいて、氷上里央ひがみりおは多少男勝りに育った。男兄弟に挟まれて、デリカシーなどあったものではない。化粧に興味なんてなかったし、そんなものより外でサッカーなりバスケットしてるほうがずっと好き。男勝りともいえる彼女はクラスメイトの女子生徒に比べ多分に活発であり よくいえば行動力があり悪く言えば短絡的、思ったら深く考える前に行動して失敗することもまま、あった。

そしてあの時もそうだった。

普段着である上下セットの黒いジャージに身を包んだ里央は、少し肌寒さも緩和されてきた3月の朝日を受けながら足取り軽くいつものランニングコースへ繰り出した。李央は走るのが好きだった。風を切るように駆け抜けるのも、ゆっくりと景色を楽しみながら進むのもどちらも高揚とともに心を軽くしてくれると思う。

見慣れた町。いつも通う公園。そこに春らしさを身につけ始めた木々。

そしてさんさんと降り注ぐ 太陽の光よりも熱い、火。

「は？」

火。

火事だ。

一軒家が轟々と燃えている。

景気いいなオイ　では、なく。　断じてそうではなく。

「はああ！？　ちよ、消防車！　消防車！！　携帯がないっ！！」  
わたわたと体を探っても携帯が見つからない。それはそうだ、走るのに邪魔なものなど持ってこない。ポケットから出てきたのは一個のチョコステイツク。

あああつかえねええ！

「だれかいないの！？　消防車呼んでよ！」

朝だからってこの静けさはおかしいだろ？

こんだけ大きな火事なのになんで誰も気がつかない？

無駄だと思いなながら叫びチャイムを鳴らす。中に人がいたらどうしよう。見殺しなんていやだ。じゃあ、中に入るのか。この熱気の中？

「ちつくしよおお！！」

里央は燃え盛る家の庭に飛び込んだ。

外付けされた蛇口を見つけると取っ手をねじり、あふれ出した水を脇に放置されてるバケツにため込みついでに頭からかぶっておく。

「ちくしよおっ」

たぶたぶと水があふれるバケツをわきに抱え、里央は燃え盛る家に突っ込んだ。

熱で溶けかけた窓を蹴り破り、煙があふれ出す中火にあぶられて

アツイ、も。

コワイ、も。

全部置き去りにして。

たぶんそこで、氷上里央という存在は死んだのだと、里央は思う。

## 序章 - 1 : 喪失 (後書き)

はじめまして。更新速度はカメより遅いですが気晴らしにでも召し上がってください。

## 序章 - 2 : 覚醒

そしてそれは生誕だったのだらうと思う。

深い深い太古の木々の生い茂る森の奥底でそれは産声を上げた。

白銀の毛並みをもつ神秘の獣の、その長たる雌に産み落とされたはずのそれは、一族のどの獣とも違う漆黒の毛並みを持つ赤子だった。異端なそれは、しかし新たな同胞として見守る一族に受け入れられた。獣に呼び名などなく、それにもやはり固有の名が贈られることはなかった。しかし母たる獣から名を与えられずとも、太古より血を受け継いできた気高き獣たちは己の魂に刻まれた真なる名を生まれながらに理解していた。それももちろん同様に、生まれおち目覚め個を自覚したその瞬間から、己という存在を認知していた。

その真名を理王しおうといった。

獣の暮らしは森を守ることに つきた。日々の糧を森から与えられると同時に森を脅かす外敵をその牙と爪と知恵をもって森から追い払うのが彼らの役目であった。神代より受け継がれた血を身に秘めた獣たちは皆、己を育む森と森の神の存在に深い畏敬の念を持っており、それは捕食者被捕食者みな一様であった。娯楽も何も無い、ただ生きて血を残し亡びるだけの生であらうとも、それは誇り高い獣の一生にほかならない。母の背をみながら、リオもまたその生きざまを体に染みつけていた。

森に生かされて森を生かし森の糧となり一族の血をつなぐことこそが至上であり定めなのだ。

しかしそれはほんの些細な出来事で踏みにじられる真実でしかなかった。

美しき川も泉もはらむ深き大樹の森に、あるはずのない火の手が上がったのだ。

それは戦火であつた。

森の中に人里はない。そこは人の立ち入れるような場所ではなく、ゆえに太古の姿をとどめた神々の森であつたのだ。しかし、森をでて山を越えれば、そこは人の手のはいつた国土に他ならなかつた。人々の争いは国を捻じ曲げ心を虐げ、荒んだ人の思考が厄災を放つた。人の手によって人の里に放たれた業火は山を越えたその森へと迫つてきた。

上がる日の手に獣たる彼らになすべはなかつた。身の丈以上もある火はいよいよ勢いを増し、彼らが懸命に集め振りまく土砂水程度では鎮火できる範囲ではなくなつていたので。

森は焼けた。

一族に先導され、森に住まう獣たちが森を去つて行つた。

しかし彼ら一族は森を離れることはない。なぜならここを守り、ことともに生きこくをともしに滅ぶのが彼らの定めであり誇りであつたからだ。

逃げるなどするはずがない。

それもまた、猛る炎へと身を投じた。

口惜しや、これが己が定めというのか。

神々を忘れた無恥の民ども、神の森を焼き払いその恩恵を踏みにじる。

その身に災いが降り注げばいい！



そして意識が覚醒する。

獣でも人でもないリオは、静かに眼を開けるのだった。

序章 - 2 : 覚醒 (後書き)

ここまでが序。次からが本編です。

木の焼けた匂いが鼻をついて、暗転の中から意識が浮上する。

いきてるのか……

あの火事の中で意識を失って生き残るなんて、こんなこと奇跡だ。無性に笑いたい気分になった。笑おうとして、からからに乾いた喉がひきつった。ひどく傷む。煙を吸いすぎたのかもしれない。

そのそと身を起しながらふるふると頭をふった。ぼやけていた視界のなかでやがて焦点が定まって、瞳に大地が移りだす。

そこに広がるのは、かつてそこにあった面影さえ残さずにあらゆるものが炎に蹂躪された焦土だった。

「え」  
なにこれ。

里央は自分の目の前の光景に啞然とした。うつぶせに大地に伏していた状態からガバリと身を起すと、ぎしぎしと関節が痛んだがそんなことを気にかけていられない。おかしい。いや、確かに火事の残骸らしいけれども、なんだか規模が違うというか、普通の民家の火事というレベルの残骸じゃないだろう。

こんな惨状の中で自分が生きてることもびっくりするというか、こんな場所にてなぜ自分は死んでいないのだ。

「ど、どどどど……！」

どうなってるんだ！

というか、え、私これからどうすればっ！

消防車はどこだ。いや、火は消えてるから帰っちゃったのか。じゃあ救急車は。だれも呼んでないなんてバカな話はないだろうが、もしかして里央は気づいてもらえず放っておかれたのだろうか。そ

んなひどい。あんまりだ！

とつさに頭を掻き毟ろうとして、指に絡まる異様に長い髪によつやく里央は気がついた。

え、なにこれ。

アスリートらしくシヨートに切りそろえられていたはずの髪の毛が、うつむくと視界を覆うほどの長さで垂れさがってくる。ロングとかそんなオシャレな名前と呼べるようなものではない。ザンバラまるで生まれてこの方一度も切っていないかのような、その髪はぺたんと地面に座り込む里央の背中を多いつくし、両脇に書き分けた前髪もまた前身を隠すようにだらだらと垂れ下っている。少し日に焼けた肌がその間からみえて。

里央は茫然と、ぺたぺたと自分の体を探る。素肌の上を。

「ちよつとこれ、どうなってるんかさ……」

里央はそこでようやく気がついた。

人気もない、どこだかもわからぬ焼け跡の中で、自分が本当に身一つで放り出されているということに。

そう、里央は服を着ていない生まれのままの姿だったのである。

「うつつうつそでしようつうつうつ！」

女なのに！ どうせまな板の胸だけだね！ それでも里央は曲がりなりにも女なのにこんなことってあっていいのだろうか！

わけのわからないことがいっぱいでもう何から解決すればいいのか、もしくは解決できることがあるのかさえわからないけれど、こんな状況を他人に見られるのはお断りだ。

だが、こんな焼け野原で……いったいどこへ？

というより、そう、ここはどこなんだろう。

「ちよ、まっつてよ、こんな……どうしたらいいのか、わかんないし……」

気を失う前とあまりにかけ離れた現実。

立ち上がりうつろつく気力も見いだせずにななへなとうなだれる里央は、自分の背後から近づいてくる人影に気がつかなかつた。

「おどろいた。生き残りがいるとは」

上から降ってくるように、聞こえた男の声は耳になじみのない言葉だった。日本語ではない。英語でもない。だが例えるのならば西洋の音に近い響き。

なのに理解できた。

するりと耳にはいりこみ、意味が脳みそに溶け込むように。

その異常さに気がつかぬまま、里央は髪の毛で体を隠すように束を握りしめ振り仰ぐ。

「だれ……？」

「ここいらではとんと聞かぬ言葉だな。異国の民か、それとも神の森に住まう森の民か？ どちらにせよ、われらとは違う人間と見える」

立っていたのは、里央がしゃがんでいるとはいえ、それでも見てわかるほどに長身な男だった。短く切りそろえられた髪は灰色。くすんだ銀と形容すべきか、日の光を受けて少し白っぽくも見える。がっちりとした上半身は左半分から胸部を覆う独特な形状をした鎧に包まれ、ああ、この人は傭兵なのだと里央はなぜか思った。

自分を見上げたまま動かぬ里央をどう思ったのか、男は低く笑い、自分が腰に巻いていた布地をおもむろにほどき、はずす。麻のようになごわついた布地のそれを、男は里央の頭からぶっつけた。

「言葉を解する人の子か、はたまた魔物の子か、飼いならすのも一興というものさ。陣へと連れ帰り芸でも仕込んで見せようか」

男は正面から布をかけられあたふたしている里央をぐるぐると布でくるみこみ、軽い動作で方へと担ぐ。まるで荷物のように扱うとは、人権の侵害だぞ！ とままならない動作で胸元やら背中に体当たり気味に攻撃するが、鎧に阻まれむしる里央のほうに痛かった。

魔物とか飼いならすとか、なんて物騒な男！

というか、ここはどことか里央をどうする気なのか、いろいろ

聞きたいことがいっぱいあるのに。

「おーろーせえええ!!」

「なんだ唸るな小僧。お前ごとき貧相な子供が暴れたところで痛くもかゆくもないわ。ん？ ああ、言葉が通じないのだったか？」

「通じてるわ！ このポケ！ 私は小僧じゃないいいいいいい！」

言葉が通じているのは一方だけ。相手の話す謎の言葉はなぜか里央に理解できるが、里央の日本語が相手に伝わることはなく。小僧じゃないという里央の主張もまた、男に聞き届けられることはなかった。

## 1章・01（後書き）

未知の場所でふりあおぐ。自分さえも定かではない。

男は屈強で身を鎧で固めており。

貧弱な　それも女の攻撃などへでもなく。

里央はなすすべもなくお荷物よろしく男に連れていかれた。布でぐるぐる巻きにされるく抵抗もできたものではないし、肩に担がれたまま暴れていた時に、素尻をべしつとはたかれたのも、暴れる気力をそぐのに十分だった。女の桃尻を手甲つけた手でたたくとは何て男だ、と言葉が通じるのであれば心行くまで説教してやりたいものだがあいにく通じないのだから口惜しいものだ。

里央を肩に担いだ男は、そこかしこに焼け残った大木の横たわる場所を抜けていき、そこで待機させていたらしい数人の男たちと合流した。男たちはみな、それぞれ馬にまたがっているのが見て取れる。ここからは徒歩ではないらしい。近づいてみれば、里央がおぼろげな記憶で知る馬よりも、一回りかふたまわりも大きい。乗る人間が大きいのだからといえばそれまでだが、もしかこの男、里央を担いだまま乗る気なのか　そんな不安は、はたして的中した。男は無造作に、嫌味なほどに手慣れたしぐさで馬の鞍へとまたがったのだ。当然、肩に担がれたままの里央からすれば不安定なことこの上なく、一段と高くなった視界にぞわぞわと恐怖がこみ上げる。そんな状態で馬を走らされてはたまったものではない。

「ひ、ひいつ、ちよ、こわいこわいこわい！」

思わず上がるひきつれた悲鳴に、男たちが煩わしそうに顔をしかめる。

「隊長、肩のそれ、なにか言ってるようですが」

「言葉がわからんのだから耳を傾けても仕方あるまい。まあ、森の民であるのなら、馬に慣れていないのだろうさ」

なにせここは太古の森があった場所。

立ち入る人間はなく、当然馬に乗って移動することなどない



それは男たちにとって当然の認識であり常識だった。そこからみつかつた生存者が、普通でないことになんの疑問も抱きはしない。

馬に慣れてるとか、そんな問題じゃない！

この状態の不安定さがわからないのか、このポケ男どもめ！

こ、のやろつどもっ！ いつか、目にものをみせてやるからな…

…！

女の恨み、なめるんじゃないつと唸りながら、反転してる視界を映さないように眼をきつくつむる。目的地に着くまでがくがくと揺られ続けた里央は、男たちが目的地に着くころにはすっかりくたびれてしまっていた。

この数時間でげっそりとやつれた里央がようやく地に足をつけることができたのは、野営地のような場所だった。簡易テントが並び、所々に焚き火のようなものが用意され、鍋が火にかけられている。食事の準備か。目に入るものは馬などを覗けばイカツイ男ばかりだった。どいつもこいつもでかくて腹が立つなと思う。

くるまれたままの麻布 もどき、というか腰みのような類なのだろうか を、あらためて体に巻きつけ直して、里央は自分をここまで連れてきた男を見上げた。だからだと垂れ下る髪の毛は視界の邪魔だが、こちらをぶしつけに眺めてくる巨人どもの視線を避けるには都合がいいなと思考が脇へそれる。

ほんと、どうなってんのか……

この髪の毛も 文字通り身一つであんなとこに倒れてたことも

この場所も。ここの男たちも。言葉も。なぜ、自分はこんなところ

にいるんだろうか。

私、火事の中に飛び込んだんだよね

水をかぶって、火事の家飛び込んだ。誰かいるのと叫んだのは記憶にあるし、結構煙も吸ってしまった。アツイという意識と苦しいという気持ちがないまぜになって、そのあとは何も覚えていない。火に巻かれ、死ぬんだとおもった。なのに。

生きてる　　こんな、わけのわからない場所で

人がいる場所に来たたん、急に現実を感じてしまったのかもしれない。

自分の見慣れたものとは違う何もかもに、後戻りできないのを悟ったとでもいうのか。

アト、もどりダツテ

ああ、おかしな話と心が笑う。戻る場所なんて最初からないんだ。あるのはやるべき義務と刻まれた憎悪だけだというのに　　？

あら、不思議。

何もわからないはずの世界が身に浸みて、脳みその知らぬところで魂が嗤うんだ。

だから、

「　　というわけで、今でこそ会話ひとつできない小僧だが、意思疎通が測れるようになれば森を知る上での足掛かりにもなる。森は確かに死んだ。だがそれは一部だ。深き森のごく表面、この度の一件が森の番人に見逃されるとも思えんしな。森の民がいるのであればいずれかの役には立つだろう」

ガシン、と頭をつかまれ思考の渦に沈んでいた自我が浮上する。

布にくるまり隅っこにすわっていた里央の脇に、気がつけばいちばん最初の灰色の頭の男が立っていた。視線を巡らせば数人が、まじまじと里央をながめ、各々なんとも言えない顔を浮かべている。

どうやら意識を飛ばしている間に、里央を大方のメンツで紹介でもしていたらしい。見る限り、この灰髪の男がここではそこそこのリーダー格なのだろう。なんて説明をしたんだこいつと思いつつ伏し目がちに男たちを見返してみる。と、ぱっちりひとりと目が合ってしまった。うまくそらすこともできずに、なんだこの野郎と睨み返せば、いぶかしげな顔をしていた男が面白そうに目を細めた。

「気の強そうな餓鬼だ」

いわれてひっと目を剥いた。

こいつら、そろいもそろって里央を男だと思っているらしい。

なんてことだと、憤慨してねめつけければ男は耐えられないとばかりに笑った。

「幽鬼のごとき黒髪といい、黒い眼といい、気味が悪いといやあそれまでだが。なるほど、よく見ればいい眼をしている。森に棲む野生の獣のようだ。放っておけばかみつかれそうですね」

かみつく！

うら若き乙女を捕まえて、この野郎！

先ほどまでかみついてやると思っていたことを忘れ、里央は唸った。それを見て、男たちが違いないと賛同する。この、木偶の坊どもめと息巻く里央をよそに、銀髪の男がおかしそうに喉を鳴らした。「生きがいいことには違いはない。ここへ連れてくるまでもキャンキヤン子犬のように騒いでいたものだ」

「今は静かなのは、鳴きつかれたということか。知恵のなさそうな顔をしているが……それが森に住まうものであったという保証はないはず。仮にやつらの仲間だとしたら？ 放し飼いにするのは危険なのでは？」

違う男がそう口をはさんだのは、その時だった。

言われたほうを見れば、それは栗色のような甘い茶髪をした男だった。顔立ちも、集う者たちの中では比較的優男の容姿をしていたが、反してその瞳はいっそ冷やかなまでに静かに里央を観察していた。

「放し飼いにする気はない。首に縄でもつけてつないでおくさ。しつけをするまでは」

「そこまで手間をかけるべきものではないのではと。殺せば済む」

は、殺す？

自分のことを言われているはずなのに、当然のように出てきた物騒な単語に思わずきよとんとしてしまふ。こいつ、当然のように、里央を殺していいものに分類しやがったのだ。まるで燃えるゴミをゴミ箱に入れなさいとでもいうかのようにな！

人を簡単に殺すなんて口にできるといふ場所なんだ、ここは。いままで考えたこともなかったそのことが、急に現実になったような気がした。

コワイ。

思わず身を縮め、銀髪の男を見上げる。男は何も言わず、薄い笑みを浮かべているだけだ。

「おまえはこれが刺客であるとしても？ 火事の中服一つまとわず、座り込んでいた子供が？」

「それが仮にあの森に住んでいた『何者か』であったとして、ならばそれは森の番人側の生き物なのでは。外の人たる我らに友好的にするとは思えない。寝首をかかれる可能性があるものを、手の内に置くのは賛同できない」

男たちの事情など、里央は知らない。男たちの言う森も、番人も、やつらも、なんのことだかはわからない。

ただ、この茶髪の男が言いたいことはわからなくもなかった。

見る限り西洋に近い髪色や顔つきをしているものが多い。そんな中で、東洋の容姿をもち、あまつさえこんなならだらと髪を伸ばした幽霊のような非現実な者が現れたら、警戒したくもなるだろう。でもだからって、殺すなんて考えなくてもいいじゃないか！

冷たく睥睨され、身を固くする里央を、銀髪の男は不意に抱き上げた。縮こまっていた体が持ち上げられ、見上げていた男たちを見下ろす位置になる。

「ちょ、ちょ、なにすんの！」

恐怖も忘れ、反射的にベチンと男の額をはたく。啞然とした視線を周囲から受けて、里央はようやく我に帰った。

な、にしてんの、私！

ここは害はないですよって、アピールするところじゃん……！！  
「ゼノ。お前の意見は正しい。だがな　どうでもいいのさ、そんなことは」

銀髪の男は里央の平手をとがめなかった。ただその手をつかみ強く握る。骨がきしむような音がして、ひゅ、と声のない悲鳴が喉から漏れていく。おびえる里央を見て、男は心底楽しそうに笑っていた。

いたい、こわい、コワイ。なにこの人。

「理由づけなどどうでもいいのさ、結局のところ。これが、とても面白い獣だと俺は直観したそれ故に、飼うだけのこと」

邪魔ならばその時に殺せばいい。

どうせこの小さなケモノは、か弱く、ひねり殺すのに造作もないイキモノでしかないのだと。

それを知る男たちは、灰髪の男の言葉にもはや異論を唱えなかった。形上であれ、こうして里央は得体のしれない男たちに飼われるケダモノとなったのだった。

1章・02（後書き）

ゆがんでる心をもつのは、  
いったい誰なんだろうか。

人が人として扱われないということがどれほどのストレスなのか。里央はその境遇になって初めてそれを理解した。

銀髪の男は、イーシャと呼ばれていた。

言葉が通じていないと思っっている　　というか一方的に理解されていると気が付いているのはわからないが　　であろうイーシャたちは、当然里央に名前を聞くことはなく、名づけることもせず、端的にケモノとよんだ。

イーシャは飼うと宣言したとおり、里央を飼った。

イーシャのテントの外に杭を打ち、そこにロープで繋がれて日中を過ごす。朝夕に散歩と称して世話係に連れ出されるほかは、勝手に動き回らないようにということなのだろう。リードはせいぜい2Mで、テントの入口まではいけるが中には入れないという程度の長さだ。夜はテントの中央の柱につながれリードの長さは1Mもない短いものに変えられる。テントの中をうるきまわったり、イーシャが簡易ベッドで休む時に悪さをしないようにということらしい。

世話係はイーシャではなく、ゼノと呼ばれていた男によって選ばれた。

ゼノから見て信頼できる程度に油断せず、目を離さず、最低限の世話をする者　　ということか、選ばれたのは日に焼け浅黒い肌を持ち、スキンヘッドの頭になにやら民族模様の刺青を入れているカールザークという長身の男だった。

目は森の緑のようにきれいなエメラルドで、目つきの悪さを3割

ほど軽減させる力があるなと里央は思った。

「黒い獣<sup>ジュジュ</sup>、今日の餌だ」

朝訪れたカルザークがぞんざいな手つきで、木の実のようなものを放り投げる。

イーシャは里央をただの『黒い獣』 それは、音としてきくと『ジュジュ』と聞こえた と呼び、それに倣い他の男たちも里央を黒い獣<sup>ジュジュ</sup>と呼んだ。

里央は地面に落ちた実を拾うと、みかんのように皮をむいた。ここに来てからの主食であるそれは外皮を剥くと薄い膜に覆われた黄色い実が顔を出す。口に含むと濃厚なとろりとした食感に甘酸っぱい味がするのだ。味としては、オレンジのようなビワのような、はたまたイチゴのような、いつそそれらをミックスしたようなもので、正直里央の好みの味だった。水分の補給もできるし、なによりおなかによくたまるのがいい。

まあ、最初は地面に捨てられたものを拾って食べるなんて、想像もつかなかったけどさ……

直接手渡ししてもらうことなんてほとんどない。無造作に捨てられたものを当然のように拾い食す自分が悲しいが、食べなければおなかがすく。空腹のひもじさにくらべれば、拾い食いなんてなんとも思わないようになってしまった。一週間もたたないうちに順応するそんな自分を思うと、何と云っていいかわからなくなる。きゆうと胃が収縮するような痛みを訴えて、里央はぐつと唇をかみしめた。

「なんだ、もう食わないのか」

三口ほどかじったままぼうつと手の内の実を見下ろす里央に、カ



ルザークが尋ねる。言われて見上げると、やはり感情の読めない視線が返ってきた。

「食わねえならかせ。俺が食う」

「あつ……」

伸びてきた手がひよいと木の実をつかみ上げ、カルザークは一口でべろりと平らげてしまった。まだ半分くらい残っていたのになど憤慨する一方、食欲があまりわかないのも事実だった。数口で腹が膨れ、たった木の実ひとつ平らげることができない。ろくに動いていないからかもしれない。

カルザークはもくもくと口を動かしながら、慣れた手つきで里央をつなぐロープを柱から外しその一端を握る。

「ジュジュ。散歩にいくぞ。歩け」

反応する間もなく引きずるようにロープを引かれて首がしまる。

「ぐうつ」とうめくと何とどんくさいと言いたげな視線が返ってきた。女に対するこの扱いってどうなのと思うが、すぐに、自分が雄だと思われているのだというのを思い出して気持ちがあええた。

なんだかものすごく疲れている体に鞭を打つ。

再度ロープを引かれて、里央はしぶしぶ立ち上がった。

当初、文字通り生まれたままの姿だった里央だが、ここにきて一枚のシャツを与えてもらった。誰のおふるかもわからないシャツ。当然下着もないし、ズボンもないし、頭からかぶる薄汚れただぶだぶのシャツだが、裸であったことから比べればまだましだ、と思うことにした。下手したら肩から落ちそうなのシャツだが、ここにいる体格の大きな男ようであったために、それは里央のふともも半ばくらいまでの長さがあった。まあ、不格好なスカートのようなものだと思えば少しは気分も増しになる。ただしノーパンだけれども散歩は彼らがテントを張っている野営地の周辺をぐるりと回る程度だ。裸足である里央は、切り開かれた場所ならばともかく、小枝などが多く落ちて森の中へは踏み入れない。最初森へ踏み入った時は、部活動で走りなれて分厚く丈夫だと自負していた足の裏が擦

り傷で血まみれになった。当然靴が与えられるわけもなく、なおざりにまかれた包帯は今もまだ残っている。

「よお。カルザーク。ジュジュの散歩か」

義務のように敷地内をあるく奇妙な二人組に、意気揚揚と声をかけてくる男がいた。

「ここ最近で聞きなれた声。見れば、そこには最初に里央を『気の強そうな餓鬼』と称したあの男が立っていた。

「ザクリス。なぜアンタがここをうろついている」

「なぜって？　しかたねえだろう。イーシャは森へ行っちゃまった。

ゼノも付いて行ったださ。外れ籤の俺はここでつまんねえ野郎どもの世話だ」

ザクリスはあきれたような視線を向けるカルザークにやにやと笑い、あらかじめ持ってきていたらしいこぶしほどの大きさのあるパンを里央に差し出した。

「ほれ。ジュジュ。いっつもアポの実ばかりじゃあ飽きんだらうよ。黒パンでも食え」

それを里央が受け取るよりも早くカルザークは取り上げて、

「俺はイーシャから、あまりジュジュを甘やかすなと言われている」

「こんなガリガリのガキ一人、何をそうたいそうに警戒するのかね。見る、この貧弱な腕を。ちょっとくらい肥えさせたところで問題ねえだろうよ」

「そういう問題ではないだろう。与えるのはアポのみだと、イーシャが決めたのだ」

そう切り返されて、ザクリスがつまらなそうに黒パンを懐にしまいいこんだ。イーシャの言葉は、彼らにとって重い。この人々の中で、明らかに異様な容姿をした里央を懐に招くことを決めたのもイーシャ。世話をしよう決めたのもイーシャ。与える『餌』をきめるのもイーシャ。幹部　かどうかは不明だが、カルザークやザクリスなどの一部のえらそうな連中を除くその他大勢の男たちは、里央をみるとそそくさと顔をそむけて去っていくが、一度も侮蔑の言

葉を投げつけられたことも暴力を加えられたこともなかった。それは近くにカルザークがいるというのも大きな理由かもしれないが、やっぱりその大元には、『イーシャが飼うと決めた』という事実があるのだろう。

イーシャって、まじ何者。というか、こいつらっていったいなんなのさ。

ここに来てから何度も思うことだが、なんと尋ねればいいかもわからない。そもそも言葉のわからない獣としてここに置かれている里央は、下手に意思疎通ができることを伝えてこの環境が変わるのが怖かった。平然と武器を手にしている男たち。彼らに暴力をふるわれるようなことになったら 想像するだけで恐ろしい。

「じゃあさあ、外いこうぜ。散歩つたつてこんなところぐるぐるまわつて楽しいわけないだろ。森の奥にさあ……」

「ジユジユは森へ入れない。万が一でも下手な真似をされても困るし、第一あそこに出ると足が血まみれになる。誰が手当てをしてくれる？」

「森の奥に泉があるだろ？ たまには遊ばせてやれよカルザーク。ジユジユを見る。顔が死んでる。イーシャも生気のないケモノを飼つても詰まんねえだろう」

「ザクリス、それは」

「ジユジユが死ぬのが問題だつつてんじゃねえさ。だがイーシャの機嫌をそれがとっているうちは、生きのいい状態で飼っておくべきだろ」というか俺が退屈だ。せつかくの暇だ、ジユジユと遊ぶ」

ザクリスがさも当然のように言い張ったが、それってどうなんだと思う。暇だつて、仕事はないのか、仕事は。つつこみたいのをぐつところらえて、気難しい顔のカルザークとあいかわらずのにやにや笑いのザクリスとを交互に見上げた。こいつらってホントに背が高いなと無意味に腹が立った。何センチだろう、170に近い里央が

見上げる高さとなると相当だと思っただが。

カルザークは、ほらほらと促すザクリスに折れた。

日増しに、目に見えて元気をなくしていくこの珍妙な獣をイーシヤが面白く思っていないことはカルザークとて知っていたのだ。そしてこの獣が弱っているのは、不本意ながら世話役であるカルザークの責任になることも。

「だがジュジュに靴を与える気はない。泉へ連れて行くのならザクリスが担ぐのだな」

「ふうん、しかたねえなあ」

ぼつつとしてるうちにかわされたやり取りに、「う？」と首をかしげると、ザクリスがいきなり里央を抱き上げた。大人が子供にするように、ちょうど片腕に腰掛けるような体勢で抱きあげられて、バランスの悪さにあわててザクリスの頭をわしづかみにする。

「いってえ。ジュジュ！ 髪をひっぱんな！」

そ、そういわれても！

「バランス悪すぎるよー！」

つつい日本語で反論してしまう。

「ああ？ なんだ、なんて意味だ」

「しらん。高いとか、何をするとか、そんな類だろう」

「ああ、ジュジュはちつけえもんな。安心しろよ、俺あやさしいから投げ捨てたりしねえから」

だからひっぱんじゃねえといわれ、なんとか頭を抱えるようにしがみつくので手を打った。泉に連れていくと言っていたけれど。一体そこで何をさせる気なのか。

ああ。

お風呂入りたい……

泉にいったら、そこで体流してもいいのだろうか。

地べたでの生活をはじめ一週間。普段は意識しないように心掛け

ている現代人としての欲求が首をもたげてきた。そろそろ体の汚れとか、気持ち悪さとかも我慢の限界なのだ。

でも、カルザークとザクリスのいる前で、水浴びなんて……

一乙女として、それだけは断固避けるべきだよねと思う。  
乙女と思われてなんていないけれども。

## 1章・03（後書き）

人じゃない自分に慣れていく。  
そんな自分は果してなんなのだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3202g/>

---

ろってんひーろー

2010年10月11日23時00分発行